

第1回上牧町地域福祉計画及び地域福祉活動計画策定委員会 議事録

日時：令和2年7月13日（月）

午後2時～午後4時

場所：2000年会館 2階 多目的室

1 開 会

- ・事務局より、会議を原則公開とすることについて報告
- ・委員が過半数（16名）参加により会議が成立していることについて報告

2 委員委嘱

- ・町長より、委員を代表して渡邊委員に委嘱状を交付

3 町長挨拶

町 長：皆さん、こんにちは。コロナ禍の中で、少し落ち着いたかと感じておりましたが、また日本全国いたるところで感染者が多発をしてくれているのが現状です。特に東京の場合は200人超えが何日間も続いている状況ですが、一概に怖がる必要もなく、検査対象人数、たくさんPCR検査を受けておられますので、そういうことから考えると、妥当な数字ではないかという気がしますが、若い人達に多く出ていることに大変危険を感じています。若い人達は活動範囲が広く、軽症な方が多いこともあり、そういう人達が活動を活発にされて高齢者の方々に感染をしていく、そういうことが起こり出しますと、大変危険な状況になると思っています。新聞報道で既にご存知かと思いますが、上牧町でも感染者が発生しました。今まで感染者が出なかったということが不思議なぐらいですが、住民の方々に大変注意を払って行動を取っていただいた結果、今まで感染者が出ていなかったわけですが、感染者が発生をしました。誰も感染したくて感染されているわけではありませんので、これからどのようにしていくかしっかりと見極める必要があると思います。軽症だと聞いておりますので、ひとまず安心しておりますが、問題は関係者がどの程度おられるのか、それがこれから大きく取り上げられるのかなど。今のところ落ち着いた状況とのことです。安心してしております。

そんな中で、皆さん方には大変お忙しい中、会議に出席をしていただき、ありがとうございます。地域福祉計画は、なにも大上段に構えて議論をする必要もないと思っています。我々の地域で、すべての人達が安全で安心して暮らせるよう、みんなが協力して手を取り合う、そういう町を作っていこうと

ということです。皆さん方それぞれの立場で、色々な考え方やご意見をお持ちだと思いますので、意見をしっかりと出し合っていていただいて、上牧町に住めば安全で安心して暮らせる、そういうまちづくりを、ぜひ我々としても作っていく必要があると考えています。上牧町が日本一のまちになりますよう、皆様方にはぜひ色々な意見を出していただいて、福祉計画をまとめていただけたらと考えております。本日、ご出席いただきました皆さん方には、これから大変ご苦勞をおかけしますが、引き続き2年間よろしくお願いを申し上げます、冒頭のご挨拶にさせていただきます。よろしくお願いたします。

4 委員紹介

- ・配布名簿による委員紹介

5 委員長及び副委員長の選出

- ・事務局一任の意見より、事務局案として委員長に金田委員、副委員長に渡邊委員を選出し、委員了承により決定

委員長：今回、地域福祉計画及び地域福祉活動計画の委員長を仰せつかりました。なにぶん若造ですし、不手際なこともたくさんありますが、この計画では皆さんの意見を伺いながら進めていくということを非常に大事にしています。本来であればグループになって話し合いなどしたいのですが、今回このような状況で環境を整えないといけないということで、とても広い会場になっています。今日も色々な議事がありますが、皆さんのお立場で感じておられることとか、暮らしの中で感じておられることも含めて、意見を出し合いながら、この計画をより良いものに。町長からもありましたが、日本一のまちの計画を作っていこうということもありますので、ぜひ皆さんのお力を借りながら進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

6 議 事

(1) 地域福祉計画及び地域福祉活動計画の概要について

- ・事務局より、資料1「地域福祉計画・地域福祉活動計画の概要」について説明

<質疑応答>

委員長：資料の2ページ目が1つのポイントだろうと思う。地域福祉計画と地域福祉活動計画の名前はとても似ていて、活動という言葉が入っているか入っていないかだけだが、性格は違うということの説明いただいた。地域福祉計画は上牧町が定める計画であること、地域福祉活動計画はその方針を踏まえながら、

活動する私達がより良く活動できるような行動計画となる。方向性がバラバラになると一番困るのは暮らしている私達になるので、方向性を同じにしてしっかり役割を整理しながら、一体的に作っていくということが上牧町の計画の大きな特徴ではないかと思う。仕組みの話と、具体的な活動、地域のボランティアな活動や医師会の活動、地域ネットワークの活動も含めて、活動と仕組みのことを混ぜて話し合っていくことになると思う。

吉田委員：高い指標や目標は合理的な裏付けがあれば良いと思うが、地域の現状と照らし合わせると、常にこういう問題で起こってくるものに個人情報の問題がある。事前に地域で共有するような取り組みができないか。どこまで公表して取り組んでいけるのか、みんなが共有できるのか、そこが曖昧になると、活動していても一步引かざるを得ない部分がある。そのところを法律的な部分でもう少し理解できる方法を示していかないとしんどいと思う。

委員長：個人情報の仕組みとかルールは法律にもあるが、実際に私達が活動や行動していく時に壁がある。やりたくてもやれなかったり、行きたくても知れなかったりという難しさやもどかしさもある。特に地域福祉の活動や取り組みは、直接会わないとできない取り組みもたくさんあると思うので、そのところも合わせて考えていく必要がある。

(2) 地域福祉計画及び地域福祉活動計画の取り組み状況について

・事務局より、資料2「上牧町地域福祉計画振り返り」及び、資料3「第2次地域福祉活動計画振り返り」について説明

<質疑応答>

委員長：2つの計画があって、例えば活動計画でいくつか課題も出ていたが、次の計画に盛り込んでいく時に、このことは大事に考えなくてはいけないこと、特にここみたいなことがあればお聞きしたい。

事務局：共同事務局として協議をしているところであるが、今回は一体的な作成ということで、町の評価でもあったように関係機関の横つながり、役場の中で言うと庁内連携会議があるが、そこに社会福祉協議会も含めて、地域の様々な機関や団体と一緒に協議する、相談を受け止める体制、支援に続けていく体制をどう作っていくかということが一番のミソになると思う。社協としては、そこを行政と一緒に計画の中に盛り込んでいきたい。それが、現状ある地域の見守り活動とかサロン活動の下支えになれば、安心して活動できる体制づくりにつながっていくのではないかと理解している。

委員長：資料2の5ページにも、地域の相談支援体制の充実が、前回目標にも掲げられていて、施策の方向性に位置づけられている。地域の方達の困り事や悩み、

ちょっとした相談はすぐに行政や専門職に入るわけではなくて、一緒に活動している仲間や近所の人達とかが発見したり気付いたりすることがあるが、次にどうするのか、気付いた人が全部応えるのは大変なので、そういう仕組みを作っていないといけない。仕組みづくりがいるのだろうと思う。活動計画でも資料3の5ページで、基本目標3相談体制の強化として、プロだけが頑張るというよりも、そのことを発見し、それを受け止められる形をどう作っていくかということだと思う。

尾崎委員：資料2の2ページの3番目、小地域ネットワークが夏休みに行う宿題サロンでは、地域の子も達と活動者の世代間交流の場となっており、子ども達が地域活動、福祉活動に接する機会となっているとある。実際は、昨年までは小地域ネットワークが公民館を開放して、役員は2階で待機して、社協の人達とボランティアの学生達が来て宿題サロンをしていて、社協のスタッフとボランティアの学生と子ども達だけでしている形だった。それは違うということで、特に子ども達と高齢者が交わる場にした方が良い、小地域だけではなくて、自治会やシルバークラブが連携して一緒にした方が良いという意見があった。最近、高齢者の福祉施設でも、隣接して幼稚園とか保育園が建設されて、高齢者と子ども達との交わりをしている施設が増えてきている。子どもの元気な声が聞けない国は滅びると言われているので、小地域ネットワークだけでなく、地域でシルバーの人達と一緒にした方が良い。うちは緑ヶ丘だが、そうめん流しとか公園でしている。そういう時にシルバークラブの人達も、子ども対象のゲームを考えて、輪投げや金魚すくいなどを企画して、自治会も協力するという形で、地域住民が一体となっている。地域によれば、小地域ネットワークだけがしているとか、自治会とシルバーは全く関知しないとか、それぞれ活動内容が異なる。

委員長：子ども達が集まって実施する部分も、小さい1つだけで実施するのではなくて、色々な人達が集まって関わると良いし、世代を超えた人達がつながる、一緒に何かできるような取り組みがあれば良いと思う。全部をみんなですると大変になるが、場面によっては色々なところから集まれば良いと思う。活動計画の中で、色々な人達と共同して一緒にやっていく方法が示されると良いと思う。緑ヶ丘での実践の紹介もあったが、他の実践をヒントにしながら全体に広がっていくと良いと思う。

吉田委員：子どもが地域で遊ぶ姿がほとんど見られない現状を、どう理解し、把握していくのか。私の地域では1,200~1,300世帯あって、8つほど公園があるが、子どもが遊んでいるのをほとんど見かけない。周りの地域の公園を見ても、子どもの声がしない。学校にすべてを任しているのか、塾で任しているのか。

そういう把握もしないと、これから地域を支える子どもが本当に少ない。子ども達を地域で育てるという役目もあると思う。そのあたりも取り組みの一つとして、テーマに挙げた方が良く思う。

今西委員：正直、子どもが小学校に入学するまでに、近くのどこに子どもがいるのか分からない。同じ幼稚園の子は分かるが、この地域に同じ学年の子がどれぐらいいるのか、入学してはじめて、このあたりにこんなに子どもがいたのかと、近くにいても分からない状況。

委員長：幼稚園の友達分かるけど、バラバラと小学校に集まるので、それまであんまり出会う機会もない。地域で子育てをするという観点で言うと、自治会の活動や小ネットの活動でも出会う機会はあると思うが、それを知らない人達がたくさんいる。つながることが一つキーワードだと思うが、どうつながるか。色々とお出会う場所はあるが、当事者の若い世代は知らない。一生懸命している活動はあるが、そこが繋がらないことがある。そういうことも、次の計画の課題にもなると思う。

渡邊委員：今回、地域福祉計画と地域福祉活動計画で一つの会議にして、一つの資料にしたということが前進したと思っている。長い間、ボランティア協会や民生委員をしていて、住民の立場から見ていると、福祉課と社会福祉協議会がずっとバラバラに動いている感じがあった。お互いの行事に興味がなく、重なった行事をしたり、そういうことが往々にしてあったように感じている。そういう意味で、今回初めて一緒に討論して、一緒に進めていくという形になって良かったと思う。これからも期待している。

委員長：これはとても大事なこと。地域でもよく似ていて、数はたくさんあるが、知らなかったり、つながらなかったりすることで、バラバラに動いている。困っていても、なかなかキャッチができないこともあるので、そういうところがつながる機会になると思う。

岡本委員：小地域ネットワークと高齢者との交わりが少ないという意見があったが、シルバーでは、小学校1・2年生、5・6年生との交流は年何回かしている。1・2年生は、公民館や体育館を借りて、昔の遊びをして交流している。8月には、6年生を集めて、高齢者の方から戦争の体験話をしたりして時間を過ごすということを何回かしている。最近では直接、町や自治会、保育園から、何か一緒にしてくれないかという声かけをしてもらっていて、去年は片岡台の保育園からの依頼もあった。最近では子ども会自体も存続しなくなって、学校も1学級で50名程度しかいない。シルバーは高齢者が多くて、逆に面倒見てもらわないといけないような形になってきているが、子どもと高齢者が共に遊んで、共に学べるようなところを作っていただきたいと思う。

委員長：シルバーの取り組みとしても、子ども達と交流する機会を作っている。そういう意味では、子ども達のためだけでもなくて、交流しながら学び合うことが大事だと思う。伝承することも含めて、この上牧を支えていく宝でもある。この計画も5年間の計画になるので、5年間を見通して次のステージに上がれるような、子ども達含めて、キーワードになるのではないかと思う。

谷口委員：資料3、地域での活動者が固定化され、同じ人がいくつもの活動をしている傾向にあると書かれているが、これはすごく感じる。参加されている方は、どこへ行ってもよく会う。色々なところで会って話ができるが、ボランティア活動に興味を示していない、参加されていない方はたくさんいる。子どものことやお年寄りのこと、障害者のことを知ろうと思えば、まず地域での活動やボランティア活動に参加することから始まると思う。もっとそのボランティア活動が理解されて、参加していただけたらと強く思う。

委員長：大事なテーマだし、難しいところ。こういう委員会でも同じ方とお出会いすることがよくあるが、活動者数の減少はどの町でもテーマになっている。新しい仲間を増やしていくためにどうするか、色々なアイデアはあると思うが、特効薬がなかなか無い。出会う機会とか知る機会、知らないからという部分もある。どこでしているのか分からないとか、あと半歩、背中押しできる部分があると動けることもあると思う。そこをどう伝えていくか。知らないから引いてしまっていて、知れば入っていけるようなこともたくさんあると思う。ボランティア活動や地域活動にどんどん積極的に参加して欲しいと活動されている方は思われていると思う。出会うチャンスが無かったとか、知っても動き出せなかった方達の力は、上牧町の中にたくさんあると思うので、特に活動計画の中で、どう彼らの思いや力を引き出して、動けるように環境を整えていくのかということがテーマになると思う。

竹原委員：育成会の会長をしているが、会員自体が高齢化してきている。例えば小学校とかで、障害のある人達をどう地域の方に振り返っていただくか、その啓発活動も継続的にしている。ボランティア協議会も7年目になる。その活動の参加者は全員で20人程度いて、その時はつながるが、そこから先がなかなか続かない。その辺をどのようにしていけば良いかと感じている。上牧町にはぷらっとという事業があって、そこに来ていただいて地域の方に障害を持っている方を知っていただいたと思っている。障害があるからといって特別な存在でもない。ぷらっとの存在はありがたい。これが広がっていけばと思うので、一緒に協力して何かできたらと思っている。

委員長：啓発の取り組みを続けているということであったが、伝える機会を作って、その次のステップ。出会うという機会が少ないこともあると思う。障害を持

つ当事者の方達が、地域で暮らし続けていく場合に、何か嫌な思いをしたり、排除するまちではなくて、障害があろうとなかろうと、当たり前の上牧町の仲間であるということを感じ取れるようなまちになると良いと思う。町長の「安心・安全なまち」は多分そういうことだと思う。そういうことで言うと、私達の出会う機会とか知る機会、学ぶ機会、交流する機会が大事だと思う。

(3) 住民アンケート調査について

・事務局より、資料4「地域福祉に関するアンケート調査(案)」について説明

<質疑応答>

委員長：地域福祉計画は町が作らないといけない計画であるが、町に後はよろしくということではなくて、私達の声をきちんと反映させることが大事で、そういう意味で、まずこの委員会があり、アンケートを取りながら多様な人達の声を聞くということも必要となる。後で説明もあると思うが、いくつかの場面の住民の声を聞く機会を作っていく、暮らしている人達の声を反映していくことを大事にしたいと思っている。

副委員長：5ページの4. 災害時の支援の間16、上牧町では災害時避難の助け合いがあって、届出制になっている。災害時は近所のどなたに助けてもらうという届出制度の申請をすることになっているが、どの程度そういう申請を出しているのか調べる手はあるのか。

竹原委員：子どもに障害があるので、紙をいただいている。近所で支援してくれる人の名前を書いて出すようにしていると思うが、本当に難しい。選ぶことができない。なかなか難しいと私的には実感している。

副委員長：災害時は近所のどなたに助けてもらうと書く項目があるが、それが書きにくい。自分の地域の受け持ちで、何名かは分かっているが、必要としている人のうちの何割の人が申請をしているのか。その制度は本当に意味があるのか。民生委員は民生委員で、別個で調べている。本当に必要な人が、どれだけ申請しているか知りたい。

吉田委員：手挙げ方式でしているので、誰でもまず自治会に言っていただいたら、用紙があるので、それに書き込んだら自分の情報を自治会や役場に届けることになる。だから、自分の情報を公表したくない場合は、自治会には出せない。こういうアンケートは無差別に渡しても文章を理解しにくい部分がある。社会福祉協議会が何をしているところか、成年後見制度は何かとか、分からない場合は回答の対象にならない。できれば、生活サポート制度とか、地域包括の役場が出しているパンフレットでも良いから、そういうものを一緒に入れて、各自治会にこういうものが届いたら出して欲しいと要請するとか、シ

ルバーへ要請してまとめて出してもらおうという手だても必要だと思う。

委員長：災害とか何かあった時に自分がよろしくと言える空気がある、また、それがどれくらい知られているかの認知度も、1つ課題を突きつけられたと思う。合わせて、仕組みは知っていても使いづらい、書きづらいとか、そんなことお願いして良いのか、もしかしたら誰にお願いしたら良いか分からないということも含めて、仕組みの認知度と、その使い方とか使い勝手について論議いただいた。他のところでもそういう情報を取っているのであれば、またこの会議でも共有したいと思うし、そういうことがないのであれば、できるかどうか検討が必要だと思う。また、言葉について、知る人ぞ知る言葉、なかなか一般の私達では分からない言葉がたくさんあって、それをどうするかという部分への工夫について意見をいただいた。例えば、6ページの成年後見のことについては、そもそも仕組みを知っているかどうかを知りたいということと言うと、知らなかったら知らないとちゃんと書いて欲しい。だからこそ、きちんと伝わらないといけないので、扱いをどうするか工夫が必要だと思う。もう1つ、アンケートの回収率の話もあった。他地域でもアンケート調査の善し悪しみたいな話はあって、仲間うちで取ると情報が偏ってしまう。例えばボランティア活動とか地域活動をしている方に聞くと、社協を知っているに○をしてくれる。一方で、無作為に指定すると、認知度も下がるし、回答回収率も下がるということもある。ただ、町全体の結果が分かるということがある。すべてをアンケート調査で聞けると一番良いと思うが、それはなかなか難しいので、他の団体ヒアリングなどで聞き取ることと重ね合わせないと難しいと思う。全国では、色々な調査をすると、3～4割から返ってきたら良いという感じで、5割も返ってくるとすごいという感じになる。届いたらよろしくというところまでであれば大丈夫だが、誰に配ったのかまで追いかけると無作為じゃなくなるので、その難しさがある。アンケートが届く人がいるからお願いしますということであれば、誰があたっているか分からないので、そういうことの工夫で2～3%でも上がっていくと良いと思うので、そういう工夫はできると良いと思う。災害については、もっとたくさん聞きたいことを厳選したと説明があったので、入れ込めるかどうかは検討したいと思う。

野村委員：予算の関係もあると思うが、例えば上牧町の中で使えるポイントみたいな、何か特典がついていると、返そうと思う底上げになるのではないか。100円でも2,000部となると、なかなかの金額だとは思いますが。郵送する手間もハードルになってくると思うので、方法としてメールで送る方法と2つの方法があると、まだ手軽さもあると思う。

委員長：先程の回収率の話とつながる。その特典によってくると思うが、おっしゃる通り、予算のこともある。お金になるような特典もあるし、お金じゃないプライスレスな特典もあるので、どうするのかはすごく難しいテーマだと思う。せっかくアンケートをとるのであれば、どうすればたくさんの声を聞けるのか、送り返すステップが億劫なのでメールでも良いのではないかと、それが今回やりきれるかどうかは、事務局でも考えていかないといけないと思う。メールでの方法などは、他の町でもし始めているところは出てきている気がする。郵送アンケートの難しさは、届いて開いた時点で、20 ページあると多分書かない。枚数とか文字の大きさも含めて、整理しなければいけないと思う。工夫ができそうであれば検討いただけたらと思う。

井上委員：アンケートの間 16 の関係で、無作為に出されるということで、こういう言葉を使ってはいけないと思う。健常者であれば回答できると思うが、選択肢 4 の「ひとりでは避難できないし、支援してくれる人もいない」というような回答もあるが、2,000 名を無作為抽出でされるというところで、この質問は難しいのではないかと。知っている人は最初から行動制約者なので、そういう方に特化して設問を設定されているのだと思うが、もう少し検討された方が良いのではないかと考える。

委員長：理解が難しい方とか答えづらい方がたくさんいるということで、非常に大事な点だと思う。

事務局：それぞれ委員からいただいた意見を集約して、アンケートに反映していきたいと思う。実際、障害をお持ちである方で、避難の時にどうしたら良いのか、申請のことすら分かっていない方が一定おられるのは重々承知している。団体ヒアリングも実施する予定なので、そういった中で、災害時の支援についての具体的な内容について盛り込んでいきたいと思う。また、問 16 については、前回計画で同様の設問を設定しており、5 年経ってどのような変化があるのかという意味合いもあって設定している。

岡本委員：私を含めて先生も外から委員で入らせていただいている。外から来た者が、何か言えることがあるとすれば、外から見た素敵さをお伝えすることだと私は常々思っていて、外からの情報をお伝えできたらと思う。私が上牧町でも印象深いと思っているのは、タウンカレッジという取り組み。先程の紹介にもあったが、上牧町の素敵なところは、思い立ったが吉日で色々なアクションを起こして、新しい取り組みを動かしていく、そういう地元の方々のパワフルさがあるといつも思っている。計画には色々なことが書かれているが、予定は未定なところもある。5 年間の計画でやってみたら少し違ってきて、その時気付いた新しいことをやってみる、そういう形ではじまった新し

い取り組みも色々あると思うので、機動力というか柔軟性というか、計画に書いたことを粛々とやるだけではなくて、この間気付かれたことを実行していこうというような、そういう機運が上牧町の住民や社協にあるのがとても素敵だと、長いお付き合いの中でとても感じている。アンケート調査も色々な議論があるとは思う。アンケートも、たかがアンケートされどアンケートで、うまく自身の状況を書ける方もいるし、興味がなくて回答されない方もいる。実態をこれだけで把握できるものではない。皆さんがこれから議論をされていく中の、最初のつかみとして実施されるケースが県内でも他府県でも多いように思う。このアンケート結果を地域の皆さんがご覧になって、サンプル数の問題もあるが、地域ごとの傾向も見ることができるということで、自分達の地域のことを話し合っていくきっかけとして、住んでいる実感は違うとか、最初の議論のきっかけになるように取られるケースが多いので、これだけで全てを把握しようと思うと、すごい量になって、どんどん答えづらくなっていくと思う。また、他にも分野別計画があるので、そこで補足できることもたくさんある。これだけで全部実態をつかまなくてもいいという構え方でも良いと思う。

委員長：奈良県全体の計画でもアンケートをしているので、その位置づけについて紹介いただいた。上牧町の他計画も色々動いている。紹介にもあったように、高齢者や子ども達のもの等もある。同じようなことを聞いちゃうと、書く方も負担になるので、その情報をきちんと集めながらしていく必要がある。また、アンケート調査で聞ききれることと聞ききれないことがあるので、聞ききれないことは別の方法で聞く機会を作っていきましょうということだと思う。ちなみにアンケート実施は8月中旬ぐらいからになるのか。

事務局：その予定である。

委員長：また見ていただいて、もし何かご意見があれば出していただけたらと思う。その時には委員長、副委員長を含めて、事務局と相談させていただいて、業務を進めていけたらと思う。

尾崎委員：先程、アンケートをしたらポイントがという意見があったが、一時、ポイント制が全国で流行った。あの時、上牧町でもポイント委員会を立ち上げて、何回か協議したことがある。例えば、ボランティアで地域の人ゴミ出しを手伝ったらいくらとか、ポイントを付けて、それが貯まれば町内の商店で買い物ができるというシステムを作ろうとしたが、結局できなかった。案外思っているよりも、それを実行しようとするの大変だった。それよりも、もっと住民の意識、個人の意識を変える、そういうもので還元するのではなくて、どんどん高齢化社会になっていくし、人口も減っていくので、一人ひとりの

意識や考え方を切り換えていかないといけないと思う。なかなか継続できないと思うが、ポイント制を継続している自治体はあるのか。いったんシステムとしてできあがれば上手くいくのかもしれないが、システム化しようと思ったら、なかなか大変なことだった。

委員長：地域通貨とかもそうだし、活動をポイント化、現金化できる場合もあるし、別の場に使うということも、全国的には色々な取り組みがあっとうまくいっているところもあるし、うまく広がらなくて終わってしまった町もあると思う。アイデアはとても良いアイデアだけど、それを仕組みにしていこうとなると、結構大変だという話もある。それは仕組みの問題もあるが、仕組み以外でも、例えばそういうことに自分の思い変えていくとか、お互いさまの関係とか、貯めるのは得意だけど、使うのは苦手な方たちが多いと、貯まっていく一方で循環しないとか。単なる仕組みの問題とか、お金をかけたか、かけないかの問題ではないと思う。そういう意味では、上牧町にそれが馴染むかどうかも考えていかないといけない。意見いただいたように、私達が町のことを考えたり、隣の人のことを考えたり、ちょっと困っている人がいた時に気にかけることの方が大事だろうし、それが高まっていくと、もしかするとしっくり循環するのかもしれないと思う。

事務局：アンケートの内容について、意見をいただいた箇所、内容や言い回し等について検討し、委員長、副委員長と十分協議をした上で決定したいと思うので、委員長、副委員長にご一任という形をとらせてもらって良いか。

委員一同：異議なし

事務局：そういう形で進めさせていただく。

(4) その他

・事務局より、資料5「地域福祉計画・地域福祉活動計画策定スケジュール」について説明

<質疑応答>

・質疑なし

委員長：今日の感想になるが、前回計画の時もお邪魔させていただいて、上牧町での実践もお伺いしている。タウンカレッジもすごくワクワクしながら見させていただいていた。今日は、この環境がなかなか話しづらい雰囲気を作っていると思うが、はじめに言ったように、この計画は上牧町と社協と、私達で作っていくので、皆様のご意見とか感想、素朴な疑問も含めて、話し合いながら進めていけたらと思う。10月の策定委員会の時には、調査結果が速報で

出ていると思うし、他の取り組みも動いていると思うので、そんなことも踏まえて、また皆さんのお立場から、町民としての意見としても出していただきながら進めていきたいと思う。ありがとうございました。

7 閉 会